



■ ～ぎょうせい[疑(擬)陽性、偽陽性]について～

ぎょうせい[疑(擬)陽性、偽陽性]について

以前このホームページにB型肝炎についての文章を載せましたが、その中で、擬陽性とは、「感染をしていないのに感染症検査で陽性の結果が出る」とする文章を載せました。その後、偶然インターネットで「ぎょうせい」について詳しく書かれた文章を見つけ大変驚きました。それは、言葉で説明する際は、「ぎょうせい」ですが、漢字で書く場合は、疑(擬)陽性と偽陽性の2つあり、それぞれ意味が違っていました。引用すると、



疑(擬)陽性とは、陽性ではないが陽性に近いものです。例えば、ツベルクリン反応は発赤の大きさが10mm以上を陽性と判定しますが、5～9mmと陽性ではないが、陽性に近い反応の場合に疑(擬)陽性と表現するとありました。

偽陽性とは、ある疾患で陽性を示す検査が、その疾患にかかっていない人でも陽性を示すことです。こちらの漢字が以前ホームページで説明した「B型肝炎ウイルスに感染していない人がB型肝炎ウイルス検査で感染していることを示す陽性の結果となること」を意味する文字でした。以前に載せた文章では間違った漢字を使って説明をしていました。不特定多数の方がご覧になるインターネットで、誤った漢字を使って医学用語を説明した事をお詫びいたします。二度とこのようなことが無いようにしたいと思います。

今回はお詫びになってしまいましたが、前回ホームページに載せた「偽陽性」は、私が検査を行っている感染症検査項目のHBs抗原、TP抗体、HIV抗体、HCV抗体、HTLV-1抗体の全てで起こります。また、これは学会などでも報告されている問題で、当院と同じ機械で測定している全ての病院の検査室でも同じように起ってしまいます。

「偽陽性」の様なはっきりしない検査結果の場合、再度測定を行い、信頼の出来る検査結果を報告していますが、この様な検査結果が出るたびに、患者様をとて不安にさせる重要な問題で、出てほしくない結果だと思うのですが、なくすことはできません。

このような検査結果が出た際は、先生から十分な説明を受けていただき、不安を少しでも和らげていただけたらと思います。

● 前回の記事はこちら→[2009年8月「B型肝炎ウイルス検査について」](#)

担当: 検査課 大塚 進